

シリアからの避難民への

シリア人・パレスチナ人

支援活動

シリアでの内戦状態はますます激化しています。停戦の呼びかけは功を奏さず、毎日のように多数の死者が報じられています。その多くは一般市民で、シリア国内を多くの人々が転々と避難しているほか、近隣諸国に逃れる人が急増しています。国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) によれば、10月段階でトルコ、ヨルダン、レバノンにとどり着いた避難民は各々10万人以上。所持品を持たず着のみ着のまま、地雷のある国境を越えてきた人たちは、仮設のキャンプに収容されたり、親せき知人を頼っていますが、肉体的にも心理的にも問題を抱えているケースが多く、冬を前にして支援が必要になっています。こうした事態を前にして、中東での新たな難民となっている人々を放置できないと考え、当会では、レバノンとヨルダンで避難民支援を開始することにしました。そのための募金も開始しますので、皆様のご協力をお願い申し上げます。



シリア国内のパレスチナ人がレバノンへ

レバノンには、UNHCRに難民登録している10万人以上のシリア人の他に、分かっているだけで1万人以上のパレスチナ人が逃れてきています。50万人のパレスチナ難民がシリアで暮らしてきました。政治的に

は中立の立場をとっているパレスチナ人ですが、いくつかの難民キャンプは戦闘に巻き込まれ、犠牲者もかなり出ているのです。

同じ避難民とはいってもパレスチナ人の場合はシリア人避難民とは扱いが異なり、UNHCRの保護下ではなく、国連パレスチナ難民救済事業

機関 (UNRWA) の管轄下にあります。そのため、避難民のほとんどがレバノン全土のパレスチナ難民キャンプに流入しています。シリア国境に近い北部やベッカーの難民キャンプだけでなく、バイルートや南部の難民キャンプ、2007年の戦闘で破壊されたままのナハルエルパレドのキャンプにまで1000人単位で避難民が来ていて、住居、学校や医療についても住民と分け合う状態になっています。

その結果、10人家族が住む2間の家に、新たに7~8人の親せきが逃げてきているといった状況で、ただでさえインフラも住環境も不十分な難民キャンプの中は現在混乱状態になっています。またレバノンではシリア避難民のためのキャンプは設営されていないため、貧しいシリア人避難民もかなりの数でパレスチナ難民キャンプに流入してきています。



を開始します。



8割が女性と子ども

避難してきている人の約8割が女性と子どもたちですが、レバノンとシリアのカリキュラムが大きく異なるために学校に通うことを断念している子どもも多く見受けられます。パレスチナ人避難民の場合は、レバノンでの在留許可がシリア人避難民よりも複雑で難しく、延長ができずに不法滞在になってしまい難民キャンプから出られない人もたくさん出ています。こうしたなか、冬に向けて深刻な状況が予想されます。住居を分け合っている人たちはすでに限界状態に達しています。部屋を借りるにも、一部屋の賃料が月に150ドル～200ドルに高騰しています。食料、衣料、生活必需品、燃料も必要ですが、レバノンはシリアに比べて物価水準が高く、逃げてきた人たちにはそれだけの蓄えがありません。

ストリートチルドレンがベイルート市内でも目立つようになりました。中心街の道路で寝ている人を見てショックを受けたと知人が語っています。

避難者は日々急増しているにもかかわらず、パレスチナ人避難民の支援にはまだほとんど手がつけられていない状況にあるため、当会ではレバノンでの長年のパートナーである「子どもの家」と協力して、越冬支援および、子どもたちを幼稚園、歯科、心理サポート、レクリエーション、補習クラスに受け入れるための支援を始めます。

荒野のキャンプ

ヨルダンでは10万人以上の避難民が登録していて、新設された難民キャンプに4万人以上が生活しています。数か所の難民キャンプは北部や東部の広大な場所にあり、砂埃

が舞う中に、テントが並んでいます。簡単なマットや毛布、給水用のタンク、ソーラーランタンなどは配られていますが、水道やトイレなどの設備も不十分で過酷な生活です。難民キャンプは町から離れた場所にあって出入りが厳しく制限されていて、住民は外に出ることができません。何人かの子どもが砂埃のためにぜんそくの発作で死亡したという噂を聞きました。また、食料配給を巡って住民が暴動状態になったとも聞きます。

現地のボランティアと一緒に出入りの難しい難民キャンプにやっとの思いで入りました。少年たちが私たちの顔を見て寄ってきては携帯の写真や映像を見せてくれるのですが、それらは正視できないような惨たらしい戦闘で亡くなった人たちの姿です。子どもたちがエネルギーを持って余して、鬱屈している様子がおき

りと見えます。地元の団体がおもちゃを配っていましたが、ボランティアが油断した途端に、子どもたちが置かれていたおもちゃを勝手にとり始め、大人も加わってちょっとした騒動が持ち上がっていました。キャンプで顔見知りになった10歳の男の子に、数日後再会すると目の周りに青あざが出来ていました。子どもどうしの喧嘩や大人からの暴力が絶えずあるようです。

女性と子どもの保護

ヨルダンでも避難民は女性と子どもが大半で、子どもだけで避難してきている家族もかなり見られます。地元のNGOが心配しているのは、年若い少女たちが、生活保証や居住保証と引き換えに結婚させられるケースが増えてきていることです。シリア人やヨルダン人相手の場合もありますが、湾岸諸国の男性が相手の場

合も多いそうです。また女性が収入を得るための手段がないので、表立ってはいませんが、売春をしている女性がかかりいるらしいとも聞きました。

当会は、地元の子どもや女性の支援をしているヨルダンのNGOと協力をして、子どもの居場所づくりと女性のための子育て支援を計画しています。学校に行っていない子どもたちも多く、テントやコンテナ住居の中で先行きの不安とやり場のないエネルギーを抱えて一日を過ごしています。生活苦に加えて子どもへの対応に母親たちも疲弊しています。また乳幼児への支援も足りていません。レバノンやガザ、東北などでの活動経験を活かして、子どもと母親の居場所を作り、そこで日常的な活動を継続する予定です。

難民の生活

6か所を転々とした4姉妹

リマ（10歳）、アヤ（9歳）、ラナ（4歳）、リーン（1歳）の4姉妹は、母と兄（11歳）弟（乳児）の7人で、世界遺産のバールベック神殿にほど近い難民キャンプの一部屋で暮らしています。水道がなく外から水を汲んでこなければなりません。湿気でカビ臭い部屋の中にはマットレスが3枚と毛布が3枚あるだけでした。大雪で孤立する高冷地の冬を前に暖房器具もなく寒さをしのがなければなりません。

一家は住む場所を転々としてきました。元々シリアのダリアという町に住んでいましたが、父（シリア人）が働いていたチョコレート工場が閉鎖されて父は失職したうえに、爆撃、砲撃などが激しくなり、別の町にある祖母の家に逃げました。同じように逃げてきた6家族が4部屋に同居することになり、乳児を抱えて妊娠していた母には厳しすぎる環境でした。別の親せきの家に移りましたが、そこも爆撃がひどくなり祖母の家に戻ります。しかし近くには病院もなく、身重の母は父を残して、実家のあるレバノンに子どもたちを連れて逃げてきたのです。母はパレスチナ人です。無事出産したものの、実家も3部屋に17人が生活する状態で、6人の子どもを抱えた彼女は家族に遠慮し、安い住居を探して今の所に移ってきました。1年足らずの間に6か所を転々としたのです。生まれて間もない赤ちゃんは、細菌性の腸炎を起こしているのですが、出生届けを出せ





ていない状態なので、医者にかかることもできないと聞きました。

流産をした女性

食料配布の列に並んでいた一人の女性が、シリアの家族からの携帯電話を受けていました。家が爆撃で破壊されて家財も失われたとの知らせのようでした。その時ソーシャルワーカーが女性の足に血液が流れているのに気づきました。ショックで流産したのです。

子どもや女性の多くが抑うつ状態にあります。恐怖のなかやっとの思いでレバノンに来たけれど、待っているのは厳しい生活です。足を延ばして寝ることもできないし、必要なものを買うこともできない。先行きは全く見えないがシリアに戻ることもできない。逃げてきた人たちは全員、目に恐怖と心配を宿しています。レバノンと違ってシリアのパレスチナ人はこれまでこうした状況に慣れていないのです。深刻な問題を抱えて専門的なサポートの必要な人たちは、「ファミリーガイダンスセンター」で受入れ、精神科医や臨床心理士が対応しています。

働く子ども

スーパーマーケットのレジで袋詰めをしている12歳と14歳の兄

弟に会いました。毎日10時間働いて母や幼い兄弟などを養っているそうです。母と子どもたちはシリアで国境を超えるために700ドルを払っていました。すでにヨルダンに

来て5カ月がすぎ、住居の毎月100ドル払わなければならないそうです。一家の蓄えはなくなってしまいました。シリアにいる父や兄とは音信不通になり、いまは子どもたちが稼いでくる1カ月150ドルが8人家族の生活を支えています。

少年の携帯電話

アンマン市内で会ったシリア人の男の子。家を訪ねた時には温かい笑顔で迎えてくれ、なにやら安心した気分になったのを覚えています。家族と話をしている最中、隣に座ったその子がしきりに携帯電話をみせようとしてきます。何気なく見ると、頭に銃弾を受けて亡くなり遺体で横たわる兄(8歳)をその子自身が携帯電話で映した動画でした。頭部が破損して脳が部分的に見える状態で、現実を引き戻されたのを覚えています。こんな状況でもその子は笑顔をみせてくれたけれど、だからこそ見過ごされがちな心理サポートが大切なのでしょう。

国境の街

ヨルダン北部、シリアとの国境に接するラムサの街は、激戦が繰り広げられているシリア国内の街ダラアからわずか十数キロしか離れていません。「国境付近にシリア

からの砲弾が流れてきたり、早朝ダラアでの砲撃の音で目が覚めるというようなことがしばしばあります。一見すると平和に見えますが、押し寄せる難民と彼らの苦境が山のすぐ向こうの現状を伝えています」と地元の先生に聞きました。

難民の思い

シリアでの内戦から、命を賭し財産を費やしてヨルダンへ命からがら逃れくる難民。一方で彼らの中にはヨルダンでの避難生活に幻滅し、さらなる逃亡を図る者も多いのです。難民キャンプから市内への逃亡、危険を承知でシリアに戻るといような逃亡。そして人生そのものからの逃亡。あるキャンプで実際に自殺を考えているというパレスチナ人に会いました。生き延びることはできても、尊厳のある人間として生きて行くことはできないと多くの人が嘆いています。

サッカーの試合で盛り上がる

ヨルダン北部で地元の若いボランティアたちと一緒に、サッカーイベントを開催しました。最初は難民キャンプの子どもたちを招く予定だったのですが、外出許可を取ることができず、地域の中で生活している避難民の子どもたちを集めました。地元の若いボランティアが20人ほど協力をしてくれて、午前と午後の2回、5歳から14歳までの男の子120人以上が参加してサッカーの試合をやりました。広々とした場所で元気に楽しく試合ができました。参加賞として水筒を配ったのが好評でした。地元の若者たちも、支援活動に参加できたこととても喜んでくれました。